

保田與重郎『芭蕉』の構造可視化

－日本語文章の絵解き－

谷 口 敏 夫

0 目次

- 1 はじめに
- 2 調査の目的と方法
- 3 文章地図
 3. 1 用語の分類
 - (1) 人名の概略
 - (2) 事項名（句集・俳諧など）の概略と分類
 - (3) 用語の傾向
 - (4) 用語の地図化
 3. 2 事項と人物の認定
 - (1) 事項・人物の名寄せについて
 - (2) 事項・人物の概説
- 4 クラスタ分析
 4. 1 事項・人物のクラスタ分析
 4. 2 事項・人物地図に表れた小概念
- 5 まとめ
- 6 附録
「落柿舎のしるべ」他について

1 はじめに



本論で扱った『芭蕉』（写真は新学社文庫）は評論家保田與重郎が初版を昭和十八年十月二十一日に新潮社から出した。谷崎昭男の解題^{*1}によれば、「日本思想家選集」の第二冊目になる。第一冊目は蓮田善明『本居宣長』であった。日本がアメリカと開戦したのが昭和16年12月8日なので、社会情勢が騒然としていた時期に『芭蕉』が手頃な選集として世に出たといえる。

保田による芭蕉観は概略、中世後鳥羽院以降の隠遁詩人の系譜の中で最後の詩人ととらえている。「後鳥羽院以降」とは承久三年（1221）の変で後鳥羽院が鎌倉幕府執権北条氏に破れ、隠岐島に流されその地で亡くなった以降を指す。

保田の業績のうち万葉集と芭蕉とが裾野も広い高峰と言える。万葉集については保田の生地が奈良県桜井市であったことから、三輪山周辺の古代世界から平城宮の大家家持まで、すべて彼の歩き訪れた土地柄の影響が大きい。また芭蕉については、大津市膳所にある義仲寺の昭和再建に深く関わり、保田の墓は義仲や芭蕉とともにその地にある。保田は芭蕉の弟子の向井去来が庵したという京都市右京区嵯峨野・落柿舎の再建復興にも関与し、一時期その庵主も勤めた。つまり万葉集も芭蕉も保田にとっては机上の論ではなく、現代生きたその日その日に息を吸うように味わっていた世界と言える。

次年度（平成22年）に研究対象と考えている『後鳥羽院』について、私は若年時には、芭蕉の源流が後鳥羽院という風に考えていた。保田の主要な著作で『後鳥羽院』と『芭蕉』とを較べると、世評では後鳥羽院の方がよく知られている。しかしこの十年以上保田を再読し考えてきた中で、後鳥羽院論は芭蕉論の一部であったと、谷崎昭男の講談社解題から気づかされた。

さて『芭蕉』を理解する言葉として不易流行がある。これは本論の基底とな

* 1 『保田與重郎全集 解題／谷崎昭男』講談社、平成元年

り表に現れにくいものなので、最初に私自身の感じた所を記しておく。

不易流行とは芭蕉が心に暖めたものの考え方である。流行が劣るわけではない。詩歌、俳諧にあっては、おりおり人々の心をとらえるスタイルが必要になる。人々に合わせすぎてもならないし、前衛に傾きすぎても流行とはならない。そして流行なしでは一般に俳諧は成り立たない。その中で芭蕉、そして保田與重郎が詩歌文芸に求めたものは、この日本という四季のゆたかな国土で、連綿と続いてきた歴史の中に、継承するものと、折々に変化するものとを分けて、変化少なく残された道を「不易」と嘆じたのであろう。嘆じたのはその道が細いからである。朝廷の雅を、武断政治（鎌倉執権政治以降）の中で全国津々浦々にまで、細々と伝えた遊行僧や「道の人達」、連歌俳諧師達が心に描いたものが不易であり、日々流行の中で詠んだ歌や俳諧が流行なのだと思える。あわせてそれが我が国の歴史に裏打ちされた風雅^{みやび}であったと考える。

本論は保田の『芭蕉』を題材に、「このテキスト中の用語を抽出し、その傾向を分析し文章地図にまとめた。その用語の一つ一つには保田の肉声が宿っているが、恣意に依らない再現性を伴う方法論で分析をした。*2」と、言えるが、同じ方法論を用いても、過去の諸作とは違った文章地図がみられたことを、最初に記しておく。

2 調査の目的と方法

本論の目的は保田による松尾芭蕉の伝記『芭蕉』を、用語の頻度によって可視化し、保田の意図した独自の芭蕉理解の構造を考察することにある。以下に、テキスト『芭蕉』の目次を示す。

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. はしがき | 5. 道と俳諧 |
| 2. 祭と文藝 | 6. 風雅論の歴史感覚 |
| 3. 野ざらしの旅 | 7. 句附の問題 |
| 4. 有心と無心 | 8. 軽みと慟哭 |

* 2 保田與重郎『日本の美術史』の構造可視化／谷口敏夫。京都光華女子大学研究紀要 第46号、p102

図書の構成として全8章と仮に設定する。1章の「はしがき」は2頁分なので対象章としては機能していない。各章には節・項がないので、すべて章単位で扱い考察した。

この考察を明確にするために、あらかじめ粗く抽出した用語群を分類し、その傾向から、俳諧関連用語や、固有の句集、人名を正規化（名寄せ）し異同をただした。さらに用語間のクラスター分析をし、デンドログラム（樹形図）をつくり、この用語の配列をもとに文章地図（注：用語頻度の等高線グラフ）を作成した。地図上にあらわれたパターンをテキストにあたり、小概念として確定した。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を把握することが、本論の目的である。

今回は、この文章地図が比較的明瞭に現れたので、便宜的にパターンの説明に際し島、ないし大陸という言葉を使った。これは文章全体を大海原とみ、そこに点在する小さな概念集合である用語群を島とイメージしたことによる。

使ったテキストは、新学社2001年『保田與重郎文庫11 芭蕉』で総頁が236あった。テキスト総量はおおよそ151,200文字、400字原稿用紙換算をすると378枚の作品である。以下、この引用にあたり「～」は省略を意味する。

3 文章地図

まずテキストから、KT2システム^{*3}で粗く様々な用語を取り出した。抽出した用語数は13457件、その異なり語数は4874種となり、用語の繰り返し率（4874/13457）は36.22%であった。

今回は俳諧用語、作品名、俳人名を中心に予測して採取した。これらに手を加えずに整理したのが表1である。この表からテキストの傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめる。本論では、そこからより精緻な文章全体の地図をつくり、テキストの中に含まれる用語分布のパターンを可視化することになる。

*3 谷口・自製システム

表1 用語の頻度 (12頻度以上の用語、151/4874 異なり)

頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語
762	芭蕉	29	わびさび	17	一句	13	風景
232	俳諧	28	自身	16	發想	13	美學
201	詩人	27	關係	16	國史	13	道德
201	思想	27	我國	16	野ざらし紀行	13	冬の日
168	歴史	26	門人	16	抽象的	13	註釋
101	考へ方	25	輕み	16	象潟	13	仲間
85	文藝	25	舊來	16	宗祇	13	中心
84	時代	25	西鶴	16	故人	13	想像
78	文學	25	生涯	16	近世	13	絶對
72	風雅	25	世界	16	確立	13	場所
69	ことば	25	心境	15	萬葉集	13	宗鑑
65	意味	25	自信	15	發句	13	故郷
65	いのち	25	根柢	15	文藝學	13	古今集
63	文章	25	後鳥羽院	15	悲痛	13	紀行
55	慟哭	23	回想	15	貞門	13	解釋
55	民族	23	其角	15	調子	13	歌心
54	作品	23	あはれ	15	抽象	13	もののあはれ
50	文人	22	去來	15	精神	13	みやび
47	西行	21	文化	15	出發	12	明確
46	傳統	21	態度	15	祭り	12	雰圍氣
44	談林	21	子規	15	根據	12	匂ひ
43	心持	21	議論	15	古人	12	人生
42	日本	21	歌枕	15	機縁	12	蕉門
42	宗因	20	流行	15	偉大	12	松島
39	自覺	20	生活	14	藝能	12	空海
39	江戸	20	感慨	14	變化	12	極致
38	立脚	20	一貫	14	壯士調	12	虚栗
38	野ざらしの旅	20	安心	14	立場	12	危機
38	原因	20	わやく	14	守武	12	貫之
38	滑稽	18	表現	14	言葉	12	意氣
37	俳句	18	先人	14	興味	12	さび
36	自然	18	自分	14	一變		
35	生命	18	支考	14	伊勢		
35	事情	18	現實	14	わび		
35	わが國	18	見方	13	觀念		
34	近代	18	笈の小文	13	氣持		
33	貞徳	18	感覺	13	學問		
32	最後	18	感動	13	壽貞		
32	猿蓑	18	貝おほひ	13	雄心		
29	理解	18	一筋	13	復興		

3. 1 用語の分類

ここでは人名や事項名について、表1であらかじめ概略を把握し、さらに後述3.2で詳細に分析し名寄せ作業を行うことになる。この表1は用語の荒い抽出によって、頻度12以上のもの151件をまとめたものである。テキスト全体の異なり数が4874件あったので、頻度上位3%の表といえる。

表1からテキストの特徴がいくつか見られたので以下に概略を記す。

(1) 人名の概略

人名で上位になっているのは16名あがった。以下（）内数値は頻度とする。芭蕉（762頻度）で第一順位となり、以下西行（47）、宗因（42）、貞徳（33）、西鶴（25）、後鳥羽院（25）、其角（23）、去来（22）、子規（21）、支考（18）、宗祇（16）、守武（14）、壽貞（13）、宗鑑（13）、空海（12）、貫之（12）と続く。名寄せをする前の概数ではあるが、頻度の最上位に「芭蕉」という人名があるのは、少なくともこれまで調査した保田のテキストでは『萬葉集の精神』においては異例である。過去のいくつかのサンプルを挙げてみるが、人名自体の順位が上位に上がる事例は珍しい。

『日本浪漫派の時代』では3名／99件の上位頻度用語で、21位にマルクス（75）以下、亀井勝一郎（35）、中谷孝雄（32）

『萬葉集の精神』では17名／120の上位頻度用語で、家持（777）が第一順位で、以下人麻呂（161）、仲麻呂（125）と合計17名が続く。

『現代畸人傳』では6名／100件の上位頻度用語で、14位に豊壺（60）以下、三村先生（48）、工藤君（30）、岡先生（27）、兵本（24）、普羅（22）とあり、文化勲章を受けた数学者岡潔、俳人の普羅以外は全て市井の人である。

『日本の美術史』では7名／162の上位用語頻度で、20位に聖徳太子（73）、聖武天皇（31）、鐵齋先生（30）、太閤（28）、道長（21）、天心（20）とある。

頻度総数も異なり、かつ荒い抽出なので正確さはないが、傾向*4として『芭蕉』

*4 対象テキストの総量からも、上位に上がる人名の頻度にはばらつきがあるが、この時点では「荒い」「概略」を見るにとどめておく。

は芭蕉についてもっとも語られ、関係人名も『萬葉集の精神』に等しく多様といえる。以下に16名の人物の簡単な説明をしておく。

- a. 空海 (12)、紀貫之 (12)、西行 (47)、後鳥羽院 (25)：平安から鎌倉時代にかけての人で、空海以外は歌人として著名。空海は思想家、宗教家として言及されている。
- b. 宗祇 (16)『水無瀬三吟百韻』：中世・連歌の芸術性を高めた。和歌的な有心連歌／柿本連歌の系列。
- c. 山崎宗鑑 (13)『新撰犬筑波集』、荒木田守武 (14)『俳諧之連歌独吟千句』：中世・滑稽卑俗な俳諧連歌。滑稽な無心連歌／栗本連歌の系列。
- d. 松永貞徳 (33)：江戸時代初期、俳諧の庶民への普及。その門第一門やスタイルを貞門と呼ぶ。
- e. 西山宗因 (42)『談林十百韻』、井原西鶴 (25) < 矢数俳句 >：江戸時代、貞門衰退をつぎ、自由闊達なゲーム的俳諧の流行。派やスタイルを談林と呼ぶ。
- f. 芭蕉 (762 頻度)：一門を蕉門、そのスタイルを蕉風と呼ぶ。
- g. 其角 (23)、去来 (22)、支考 (18)：蕉門、後の芭蕉十哲に含まれる。
- h. 壽貞 (13)：詳細は不明だが、保田は当時『芭蕉と壽貞／穎原退蔵』の説から、壽貞を芭蕉の内縁関係の妻とみている。
- i. 正岡子規 (21)：明治時代の俳人・歌人。

保田による芭蕉の論考に際し、事前に説明を加えた方が分かりやすい人物は、空海 (12)、紀貫之 (12)、西行 (47)、後鳥羽院 (25) の四名である。紀貫之は勅撰和歌集・古今集の編者。西行は後の新古今和歌集に最多の歌 (94 集) を選ばれた遊行僧。後鳥羽院は第 82 代天皇にして新古今和歌集の実質的中心撰者。上皇となり 1221 年承久の変により鎌倉幕府から隠岐島へ流され、その地で崩御 (1239)。

参考に真言密教・空海と西行の関係を「笈の小文」を述べた所から引く。

吉野から芭蕉は高野へ出た。高野は云ふまでもなく空海の開いた千年の靈場である。こゝで少し云ひたいことは、芭蕉は西行の古を慕つた

人だから、空海のなつかしい土俗信仰を身近に感じてゐた人である。「南山大師の筆の跡にも」といふ句は既に云うたとほりである。

～しかし西行が空海をしたつたのは、空海の生きてゐる土俗と民間をなつかしんだからである。このこともわが文人の長い習慣で、佛者ではない文人の鼻根は、過去に於ては大い空海だつたが、近ごろの文人の間では、空海の心持の生きてゐる土俗をきらつて、最澄の學園を云ふことの方が多い。～（風雅論の歴史感覚）

保田が空海を挙げたのは、引用にわかるように空海への西行の気持が優先する。この関係で芭蕉も西行への気持から南山大師（空海）を引いたと言える。

（2）事項名（作品・俳諧用語など）の概略と分類

表1に表れた高頻度の用語を分類し、表2とした。分類の項目は5つにし、「その他」を加えた。以下に各分類内容について説明する。

・文明観 頻度総数 1180

保田の著作には経験即によれば、「文明観」「歴史観」用語が頻出する。今回は歴史観に目立った用語の頻度が少ないので、＜文明観＞としてまとめた。もちろんテキスト全体を読めば、保田はその歴史観にたつて芭蕉を見ていることがよく分かるが、用語の荒い抽出レベルなのでより顕著な方をとった。

先頭順位の思想（201）、歴史（168）に並んで慟哭（55）が上位を占めるのは、保田の芭蕉を見る特徴である。これは具体的な設問として「なぜ、芭蕉を論じるに、慟哭という用語が必要だったか」を立てることができる。あらかじめ関係箇所を引いておく。

かうして「輕み」を云ふ根柢の大自然と大安心に結ばれた芭蕉は、つひに沈痛な慟哭を描き出した。かつての慟哭でもない、中世詩人の嗚咽でもない。それは永い世々の詩人のみちを生きた芭蕉の、獨自の涙もろさから生れた、全く新しい慟哭の文藝であつた。「輕み」と「慟哭」が、どういふ形でつながれるかを思ふものは、「此の秋は何で年よる雲に鳥」のもつ大なる歎きの中に、萬代の青春をして、その心魂を氷ら

せるやうな沈痛の雄心を味ふべし。これは旅中閑寂隠者の概念で考へてはならぬものであらう。(軽みと慟哭)

表2 用語の分類 頻度 12 以上、151 用例 (頻度合計 5147)

文明観	文学芸術	俳諧和歌	その他
201;思想	201;詩人	232;俳諧	38;立脚
168;歴史	85;文藝	72;風雅	38;原因
101;考へ方	78;文學	44;談林	35;事情
84;時代	69;ことば	39;江戸	32;最後
65;いのち	65;意味	38;滑稽	29;理解
55;慟哭	63;文章	37;俳句	28;自身
55;民族	54;作品	29;わびさび	27;関係
43;心持	50;文人	26;門人	25;舊來
42;日本	46;傳統	25;軽み	25;生涯
39;自覺	25;心境	23;あはれ	25;世界
36;自然	21;文化	21;歌枕	25;自信
35;生命	20;感慨	20;流行	25;根柢
35;わが國	18;表現	20;一貫	21;態度
34;近代	18;感覺	20;わやく	21;議論
27;我國	18;感動	18;一筋	20;安心
23;回想	16;發想	17;一句	18;先人
20;生活	15;悲痛	16;象潟	18;自分
16;近世	15;文藝學	15;調子	18;現實
16;國史	15;祭り	15;發句	18;見方
16;抽象的	14;藝能	15;貞門	16;故人
15;精神	14;言葉	14;壯士調	16;確立
15;抽象	13;註釋	14;伊勢	15;出發
13;觀念	13;解釋	14;わび	15;根據
13;道德	13;美學	13;雄心	15;古人
13;風景	13;學問	13;仲間	15;機縁
1180;	972;	13;故郷	15;偉大
		13;紀行	14;變化
人名	作品名	13;復興	14;立場
762;芭蕉	38;野ざらしの旅	13;歌心	14;興味
47;西行	32;猿蓑	13;もののはれ	14;一變
42;宗因	18;笈の小文	13;みやび	13;氣持
33;貞徳	18;貝おほひ	12;句ひ	13;中心
25;西鶴	16;野ざらし紀行	12;蕉門	13;想像
25;後鳥羽院	15;萬葉集	12;松島	13;絶對
23;其角	13;冬の日	12;意氣	13;場所
22;去來	13;古今集	12;さび	12;明確
21;子規	12;虚栗	948;	12;雰圍氣
18;支考	175;		12;人生
16;宗祇			12;極致
14;守武			12;危機
13;壽貞			774;
13;宗鑑			
12;空海			
12;貫之			
1098;			

芭蕉が晩年となえた「軽み」と、重い印象のある「慟哭」が対置されている引用である。「此の秋は何で年よる雲に鳥」はのどかで「閑寂隠者」の軽やかな詠嘆と観じることでもある。しかし保田はこの句に、単純に秋と空の雲や鳥を見た詠嘆ではなく、国史の長さ、古い時代からの詩歌の流れにそった、文明の護持という芭蕉の文明観を見、そこに沈潜した「慟哭」があると解く。慟哭とは、国史の始まりと経緯との中に、建国の苦しみと幾たびもの危機を持った我が国の歴史を通して偲ぶ、詩人の表現としてあった。これは保田が万葉集編纂における家持の激しい慟哭をみた経緯*⁵に同じくする。

・人名 頻度総数 1098

『芭蕉』に表れた人名はすでに 3.1 (1) 人名の概略で述べたところである。今回の分析では、人名「芭蕉」は普遍的な事項用語として扱われていると言える。あまりに著名な特色ある人名は、その人を指すだけでなく、その人に関連するすべての事象を代表している用語として考えられる。数の上では次のような対比があり、これは尋常ではない。

人名比「芭蕉：その他の人名 = 768：330」で、芭蕉の占める割合は人名の 70% となり、芭蕉だけに焦点を合わせた著作と言える。なお『萬葉集の精神』では大伴家持が、777：1720 となり、45% である。

・文学芸術 頻度総数 972

「詩人」が先頭にある。保田は「俳人」という言葉をこの著作では 6 頻度しか使っていないので、芭蕉を俳人と呼ぶよりも「詩人」として扱っていると考えられる。

この分類項目とは別に〈俳諧和歌〉とした分類項目とは異同の線が引きにくい。分類方針としては、より抽象度の高い用語をこの区分にいれ、より俳諧和歌に特化される用語を〈俳諧和歌〉に入れた。もちろん用語を峻別するのは無理があり概略とする。

たとえば「文化」は〈文明観〉に入れても間違いはないが、ここでは〈文学

* 5 建国し、幾多の困難を経て国を維持し文明を造り出すのは、現代では想像もつかない難行である。それを歌うのが代々の詩人であるとするなら、護持してきた文明の重さに、詩人は慟哭する。

芸術>という概念を<文明観>に含まれる下位概念と考えたので、分類の継承として「文化」を文明の側面にとらえ、テキストで特化された<文学芸術>にまとめた。つまり<俳諧和歌>にまで降ろすことは避けた。

・俳諧和歌 頻度総数 948

この区分は、当初は俳諧用語と一般的な詩歌用語とを別立てにする方法もとったが、「俳諧」が先頭にあるように、保田の論調では芭蕉の俳諧を説き起こすための「風雅」「あはれ」「歌枕」「歌心」であったことから、区別を取った。

また「連歌」については頻度 12 以上のルールを満たさなかったので割愛した。実際には他の用語と接続した形で、{連歌 (11)、歌連歌 (9)、連歌師 (7)、和歌連歌 (4)、連歌俳諧 (4)、連歌俳諧師 (3)、……} と用例頻度は高い。ただ「連歌」という独立用法が 11 と少ないことは、「俳諧」の 232 頻度に較べて論を進めるに重い要素はなかったと推測する。

・作品名 頻度総数 175

ここには著名な「奥の細道」が入っていない。「奥の細道」は頻度 10 で、「奥の細道の旅」が 2 回表れている。とりあえず、荒い用語の抽出レベル (12 頻度以上を扱う) では入れなかった。

この<作品名>頻度を見る限り、保田が芭蕉に見た重要な作品ないし紀行は「奥の細道」よりも、「野ざらしの旅」、「猿蓑」、「笈の小文」、「貝おほひ」と推定される。「貝おほひ」は、京都の貞門・北村季吟のもとで宗房として青年期を過ごした点で筆がさかれた。

「野ざらしの旅」「野ざらしの紀行」は別名「甲子吟行」が一度だけ説明されていた。これは他に『甲子吟行「御廟」の句について』という保田の独立した論がある。

以上、人名と事項との分類をした上で、次に全体の傾向を概説する。

(3) 用語の傾向

表 2 の分類内容を図 1 の円グラフにした。この図 1 から本テキストでの用語の傾向をまとめておく。

図1はKT2システムで自動抽出した用語13457件（異なり：4874）のうち、頻度が12以上の151用例を荒く大分類したものである。

<文明観（23%）>、<人名（21%）>、<文学芸術（19%）>、<俳諧和歌（19%）>と4つの大分類がほぼ均衡している。「芭蕉」が全体頻度で突出し、人名の70%を占めることから、「芭蕉」のために他の<文明観><文学芸術><俳諧和歌>用語を使っていると考えられる。

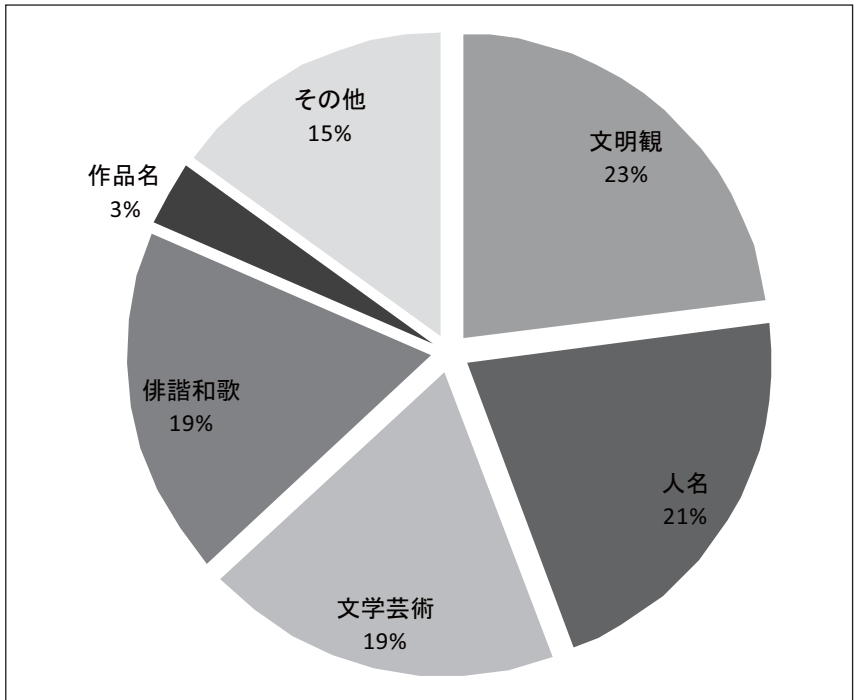


図1 『芭蕉』用語の傾向

<作品名>が3%と低頻度なのは、表2に現れた「野ざらしの旅」（野ざらし紀行、甲子吟行）や「猿蓑」という少数固有の作品内容そのものに筆をさいているからだと推定できる。一般的な文学史のように網羅的に作品名を挙げてはいない。

以上 3.1 全体を通して、本テキストの傾向・主調は、〈人名〉にある用語「芭蕉 (762)」が、他の分野の先頭用語をすべて合わせた*⁶ものよりも多く、突出している。〈作品名〉が低頻度であることから、本書が「野ざらし紀行」「猿蓑」「笈の小文」「貝おほひ」を中心に解いたもので、「奥の細道」への言及が少ないとわかる。

よって傾向として、「芭蕉」その人に焦点を合わせ、句集「野ざらし紀行」や「猿蓑」を中心にした図書と、この段階で判断できる。

(4) 用語の地図化

図 1 では、用語の大分類から全体の傾向を見た。次の図 2 は表 2 の各々のテキスト内位置情報と頻度をもとに、等高線グラフで地図化したものである。この図 2 からは、分類「◎作品名」が 1 章～8 章を通してパターンを表していない。これは単純に用語の頻度が低いからである。

まず分類の項目から見てみると（共時的分析）、4 つの大分類が第 4 章「有心と無心」から第 6 章「風雅論の歴史感覚」までの区間に現れている。この 4 つは既述のように〈文明観 (23%)〉、〈人名 (21%)〉、〈文学芸術 (19%)〉、〈俳諧和歌 (19%)〉と、ほぼ頻度数が 20% ずつの等分なので、おそらく第 4 章から 6 章にかけて保田の考えが詳細に述べられていると推定できる。さらに〈俳諧和歌〉用語が第 5 章「道と俳諧」において頻出するのが特徴的である。これはおそらく章名に含む「道」が、貫道する一筋の道として、芭蕉を和歌・連歌・俳諧史の中で描くことにより、保田の芭蕉観を示したからと言える。

各章の流れから見てみると（通時的分析）、第 2 章「祭と文芸」から第 7 章「句附の問題」という、ほぼ最初から最後まで間断なく〈文明観〉、〈人名〉、〈文学芸術〉の 3 つが表れている。これは〈俳諧和歌〉が特徴的に表れることと比較するなら、前 3 者がこのテキストでは「一般用語・概念」となっていると

* 6 各分野先頭用語として、思想 (201)、詩人 (201)、俳諧 (232)、野ざらしの旅 (38) の合計は 672 頻度であり、人名・芭蕉の 762 頻度に及ばない。

推測できる。つまり常時現れる分類用語群は、地の文と言える。

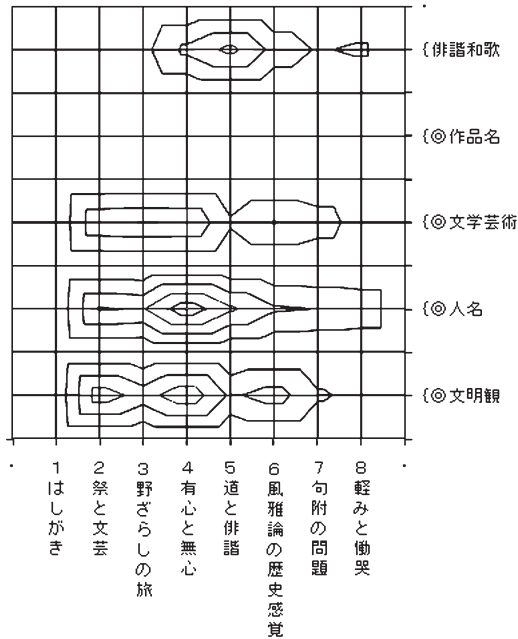


図2 『芭蕉』大分類・用語地図

通時性および共時性の二つの側面から見ると、＜俳諧和歌＞と＜人名＞とが最終章「軽みと慟哭」とで重なっているところが見える。これは「芭蕉」が全用語の筆頭（762頻度）に立つことから、最終章では＜俳諧和歌＞と「芭蕉」とが重なり、テキスト『芭蕉』の結論として、「芭蕉と俳諧」という自然な巻閉じがなされたと予断することが可能である。しかしこれらは用語の正規化^{*7}を図った上での判断を要する。

*7 正規化という用語は多義なので、ここでの正規化は「名寄せ」をさす。形式的に異なる文字列を、意味的に同値と見なすとき、それらをまとめて一貫した名称で置換することをさす。(例：{芭蕉、蕉門、蕉風} → {◎松尾芭蕉}として一括する)

3. 2 事項と人物の認定

この項ではテキスト『芭蕉』に現れた多様な用語を正規化、すなわち先述の大分類項目の内容を名寄せし、正確な頻度を測り、これまでの経験則からその上位 23 項目を選び、その内訳を表 3 とした。なお表 1 の大分類表と数値が異なるのは、ここでは正確な名寄せを行ったからである。

(1) 事項・人物の名寄せについて

表 3 に表れた事項・人物について、それをどのように決定したかの説明を加える。たとえば、表 2 の大分類から<作品名>のうち「笈の小文」を見てみる。この場合、大分類に表れた 12 頻度以上の用語を基本用語とする。表 3 では、

{◎笈の小文【20】

笈の小文 (18)

大和紀行 (1)

芳野紀行 (1)}

と表現した。最初の「{◎笈の小文」は◎印で基本用語（代表名）とし、その右に代表名の頻度合計を【20】と表示した。つまり、テキスト『芭蕉』には紀行文「笈の小文」が 20 回表現されたとなる。「笈の小文」を代表名としたのは、この紀行文は「大和紀行」「芳野紀行」と名称に揺れがあることから、あらかじめテキストを精査し名寄せを行ったわけである。なお「吉野紀行」は使われていなかった。また、「西行【52】」のように {} 無しで表示した内訳のない独立した項目は、テキスト精査によって判断したものである。俗名の佐藤義清のりきよはなかった。

(2) 事項・人物の概説

次に名寄せした中から、頻度の高い用語群の 10 件につき説明する。

-1 {◎松尾芭蕉【846】

この用語群には「芭蕉」その人と、関係する主要施設を入れた。芭蕉には {芭蕉翁、芭蕉的} も含めたが、総数が 771 とこれまでの経験則を越えるので、こ

の数値と、名寄せ・正規化した846という数値の相違は、可視化には影響が出ない。また用語頻度の上位は一般用語として扱うのが妥当と考えるが、この事例ではテキスト『芭蕉』の特徴として一般用語扱いはできない。

表3 人物・事項の名寄せ（上位23件）

◎松尾芭蕉【846】	◎芭蕉弟子【109】	猿蓑【32】
芭蕉（771）*8	其角（23）	◎後鳥羽院【30】
蕉風（20）	去來（22）	後鳥羽（30）}
蕉門（18）	支考（18）	子規【23】
桃青（11）	壽貞（13）	◎笈の小文【20】
芭蕉庵（9）	丈艸（6）	笈の小文（18）
幻住庵（7）	野坡（6）	大和紀行（1）
落柿舎（3）	園女（5）	芳野紀行（1）}
宗房（3）	許六（4）	宗祇【20】
無名庵（2）	嵐雪（4）	◎空海【18】
義仲寺（2）}	杉風（2）	空海（13）
◎芭蕉美的概念【300】	桃隣（2）	南山大師（5）}
風雅（72）	曲水（2）	貝おほひ【18】
わび（44）	越人（1）	萬葉集【17】
さび（41）	北枝（1）}	古今集【17】
あはれ（36）	↑下線は後の蕉門十哲	守武【17】
軽み（25）	◎野ざらし紀行【60】	貫之【15】
わやく（20）	野ざらしの旅（38）	宗鑑【14】
調子（15）	野ざらし紀行（16）	冬の日【13】
みやび（13）	野ざらし（5）	虚栗【12】
匂ひ（12）	甲子吟行（1）}	奥の細道【12】
うつり（8）	◎松永貞徳【59】	
夏爐冬扇（6）	貞徳（34）	
しをり（3）	貞門（20）	
ひゞき（3）	季吟（5）}	
細み（2）}	西行【52】	
◎西山宗因【141】	◎不易流行【44】	
談林（70）	流行（31）	
宗因（45）	不易（7）	
西鶴（26）}	不易流行（6）}	

注：表中の◎印は用語群の代表名を表す。【】内数値は合算である。

*8 表1の芭蕉頻度は762であるが、この表3では、たとえば「芭蕉的」「芭蕉翁」などを「芭蕉」にまとめた（名寄せ）から、771という頻度になる。

芭蕉の名称については、宗房、桃青、芭蕉と変化した。風羅坊なども使われている。蕉門は芭蕉の門弟筋、現在で言う結社・学派で、蕉風は俳句のスタイルが芭蕉および蕉門風と考えた。芭蕉庵は江戸の芭蕉の住居で変遷がある。幻住庵は芭蕉が一ヶ月ほど逗留した滋賀県大津市の山中にあった。落柿舎は弟子の向井去来が住んでいたが、芭蕉も比較的長くこの庵を使った。義仲寺は芭蕉の墓所であり、生前その境内にある無名庵を使っていた。芭蕉は江戸よりも、大津や京都を好んでいたふしがある。以上を一括して {◎松尾芭蕉} の用語群とした。

-2 {◎芭蕉美的概念【300】

この中に「俳諧*⁹」を入れていないのは、俳諧は表層的には短詞系ジャンルの一形態であり、美的概念とは言えないという判断をした。また俳諧は、少なくとも当時に限れば、松永貞徳（貞門）、西山宗因（談林）、松尾芭蕉（蕉風）に共通の用語であり、これは一般語と見なし排除するのが妥当と判断した。

この用語群のうち、芭蕉ないし蕉門、蕉風に特徴的な用語は {輕み (25)、匂ひ (12)、うつり (8)、夏爐冬扇 (6)、しをり (3)、ひゞき (3)、細み (2)} の7つの用語だと判断する。しかし本論ではその意味内容の相違に言及するのは措く。夏爐冬扇 (6) は芭蕉が惜別として許六 (に与えた) 柴門辞に表れる著名な用語であるが、いわゆる芭蕉の美学を表した用語として、当の用語群に入れた。

「予が風雅は夏爐冬扇の如し。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿、西行のこことばのみかりそめに云ひちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびを添ふると、のたまひ侍りしとかや。さればこの御言葉を力とし、其の細き一筋をたどり失ふ事なかれ。猶古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり」云々と云うて、風雅もこの道に同じと結んでゐるのは、まことに切々と心にひゞく文章であつた。(有心と無心)

ここには釈阿（藤原俊成）、西行、後鳥羽上皇、南山大師（空海）の名があたり、芭蕉の美学が適切に表れ、かつまた保田はこれをよりどころとして論を

* 9 表1の概数頻度からは、232件数えられる。

展開している。他の {風雅 (72)、わび (44)、さび (41)、あはれ (36)、わやく (20)、調子 (15)、みやび (13)} については、芭蕉の美的な概念に特化される用語ではないが、日本美学の伝統として欠かせない用語として選んだ。ただし「わやく」については保田の独特の解釈がある。

このわやくといふのは、子供のわんぱくでなく大人のわんぱくの滑稽とでも云ふほどの意味をもつてゐる。上方言葉でわやくちやにすることであるが、近世文藝の小説や俳諧には、この思想が大體大きい要素としてある。このわやくとは何かといふことは、それを描いた二人の上方の小説家として、西鶴の場合と、秋成の場合とでも、かなり異つて現れてゐる。しかし彼のしつこさと、この痾高さは、いづれにしてもわやくの二つの要素だつた。(有心と無心)

この「わやく」を美的概念としたのは、芭蕉の根底に上方風のわやく(滑稽、ひょうきん)があつて、それが紆余曲折を経て「軽み」にまで昇華したと考えるとき、俳諧の美から切り離せないと判断したからである。

3 ◎西山宗因【141】

西山宗因を代表名として、談林、および主要な人物「宗因」自身と、井原西鶴を入れた。この頻度数値が比較的高いのは、芭蕉が人気を得た最初の背景が「談林」時代だったからである。

4 ◎芭蕉弟子【109】

この中には後に蕉門十哲と呼ばれた人をいれた。表3のアンダーラインを付した者が該当する。壽貞(13)は芭蕉の妾と言われている人で、俳諧との関与は分からない。桃隣(2)は芭蕉と壽貞の間の息子と言われ、芭蕉は俳諧を指導していた。園女(5)は芭蕉の大坂での弟子で、芭蕉最晩年に句会や病床の世話をした。曲水(2)は大津・膳所藩士で、芭蕉の死に号泣したと言われている。墓の義仲寺は膳所藩領地で曲水とも関連が深い。芭蕉死後に藩の問題で上司を惨殺し切腹した、高潔の人と言われている。保田は曲水に思いが深く、昭和40年代に、曲水・顕彰碑について文章を表している。

5 ◎野ざらし紀行【60】

「奥の細道」に薄く、「野ざらし紀行」に厚いのがこの『芭蕉』である。用語としては、異称「甲子吟行(1)」をいれたが、これは保田が別に一論^{*10}を発表している。

野ざらしの旅の意義は、決してかりそめに云ふべきものではない。貞享元年の八月だから、芭蕉四十一歳の秋であつた。門人の千里^{ちり}を伴つて深川の草庵を出た芭蕉は、東海道を旅して、伊勢路に入り、外宮に詣でて、九月故郷に歸り、母の遺髪を拜し、

手に取らば消えん涙ぞあつき秋の霜

の一句を回向した。それより大和の國を行脚して、千里の故郷竹内村に到り、こゝにしばらく滞在したのち、一人吉野の秋を探り、次で山城、近江、美濃と、古い歴史の土地を巡吟し、熱田に詣で、歳暮再び伊賀に歸郷した。翌年は二月再び奈良を訪れ、京都から湖南を巡つたが、熱田に出て木曾路に入り、甲斐を通つて江戸に歸つた。この前後九月に互る旅の紀行が「野ざらし紀行」である。(野ざらしの旅)

保田の野ざらし紀行への執心は深い。母の遺髪を忍ぶ情感と、「一人吉野の秋を探り、次で山城、近江、美濃と、古い歴史の土地を巡吟し、」と、歌枕の旅よりもなお深く日本の古い故郷を巡った芭蕉の心底に心惹かれたのだと考える。

6 ◎松永貞徳【59】

ここには貞門と北村季吟を入れた。芭蕉は若い頃に主君の藤堂良忠(蟬吟)に仕えたが、蟬吟、芭蕉(そのころ宗房)は京都の季吟の門下生だった。

7 西行【52】

西行は人名単独では芭蕉に次ぐ頻度をみせた。このテキストでは西行が芭蕉に直結する歌人として扱われている。

西行が鳴立つ澤で、心なき身にもあはれが知られると歌つた歌が、中世以後の記念碑的文藝となり、鳴立澤の歌枕が、わが近古文學の精神的聖地としてこれを口にすることが一種の文人的な伊達のやうにさへ

*10 甲子吟行「御廟」の句について：初出は「俳句」昭和38年6月号。『日本の美とところ』読売新聞社、昭和45年に再録。

思はれたことは、かういふわけで必ずしも理由のない偶像崇拜ではないのである。その時代の人々にはこの一首によつて、大體歌の心とそのあり方が説き得たからである。さういふものを、中世以後隱遁詩人の美學と云うてもよい。勿論この西行の歌つたあはれは、平安時代のものあはれであり、これは古でも戀愛有情の世界のものである。このものあはれを、後のさびやわびの心と同じものとして結びつける場合、この鳴立つ澤の歌は大へん大事な役割をする。(有心と無心)

8 ①◎不易流行【44】

不易流行は芭蕉の姿を理解するのに一つの重要な視点である。不易流行の狭間にある心を、復古の本義とし、保田は次のように見ていた。

この復古の本義は、大本に於ては國に傳はる神代ながらの萬古の道、下なるわが身邊に於ては、文藝の道、俳諧の道を一貫する風雅の道としてみることである。古のある一時期の形へかへり、それを時代に合せて多少修正しようとする如き態度は、復古でなく、己の考への中の人爲人工思想を、古のものによつて修飾するにすぎない。

～

芭蕉が宗祇に見た復古の考へ方も、これであつた。宗祇の時代へかへり、その當時の文龜時代の詩風を復活するのみなら、宗因がしたやうに、世間の人氣流行にだけたよる文藝の仕事であり、多少世間の人氣はこの種の復古傾向を求めてゐても、それだけのことなら、大丈夫の志を委ぬべきものではない。芭蕉の「不易流行」の思想は、かういふことを否定した考へ方である。(道と俳諧)

9 猿蓑【32】

猿蓑は後生に名付けられた芭蕉の俳諧撰集・芭蕉七部集*¹¹のうち五番目に位置し円熟した句集と言われている。単独頻度としては「野ざらしの旅(38)」「猿蓑(32)」「笈の小文(18)」「貝おほひ(18)」と続くので、テキスト中では重い句集となっている。

* 11 冬の日、春の日、曠野(あらの)、ひさご、猿蓑、炭俵、続猿蓑。

まことにこの集は圓熟の極致で、恐らくわが文藝の最高なものの一つであらう。奮來の俳諧が「物附」ないし「心附」を主としたのに対し、こゝで芭蕉は「句附」を完成した。物附といふのは前句の中のことばの縁にたよつて附ける。馬とあるのに將棋とつける類で、心附といふのは前句全體の意をくんでつけるのである。ところがこの集で芭蕉は句附といふべきを完成した。「蕉門俳諧語録」に發句は昔から種々に變つたが、「付句は三變なり、昔は付物を専とす、中比は心付を専らとす、今はうつりひゞき句ひ位を以て付るをよしとす」(句附の問題)

10 ㊦◎後鳥羽院【30】

後鳥羽院のことは次年に保田與重郎『後鳥羽院』を考える予定なので、ここでは簡単に記しておく。ただ、近頃谷崎昭男の講談社保田全集の第十八巻解題に示唆を得た。「後鳥羽院論中のもとして芭蕉論があるのか、もしくは後鳥羽院論は芭蕉論の一部をなすものであったか、著者(保田)の構想では、おそらく後者だったと思われるが〜」

私は保田の中に大きく三つの柱を感得してきた。それは『萬葉集の精神』『後鳥羽院』『芭蕉』の三作品に代表された思想の核である。そのうち、後鳥羽院と芭蕉とは、「歴史を貫道する一つなるみち」(有心と無心)で両者が密接であることは理解してきた。ただ、谷崎の言うような意味での相互の包含関係については意識に昇らなかつた。しかし指摘してみると、たしかに『日本の文學史』でも芭蕉への賛辞の高さを思い出し、谷崎の示唆に得心した次第である。

ここで保田は後鳥羽院と後鳥羽上皇という意味上では差違のない表現について言及しているので、それを引き、保田の芭蕉と後鳥羽院についての考えの一端を指摘しておく。

こゝで芭蕉が、後鳥羽院と申し上げてきた文人間の、伝統的な御稱號を申さずに、後鳥羽上皇と厳しく正しく申し上げてゐるのも深い意のあるところと思はれる。私が後鳥羽院に對し奉つての芭蕉の關係といふことを申すのは、必ずしも一句のみをたよりとして云ふのでない。しかしこの「柴門辭」の一句が、私に日本文藝の歴史といふことについての眼を開かせてく

れたといふことは以前にも再々云うたことである。(有心と無心)

4 クラスタ分析

クラスタ分析をつかって、表3の人物・事項にまとめた用語群の相互関連を図3とした。この手法^{*12}については従来行ってきたものである。

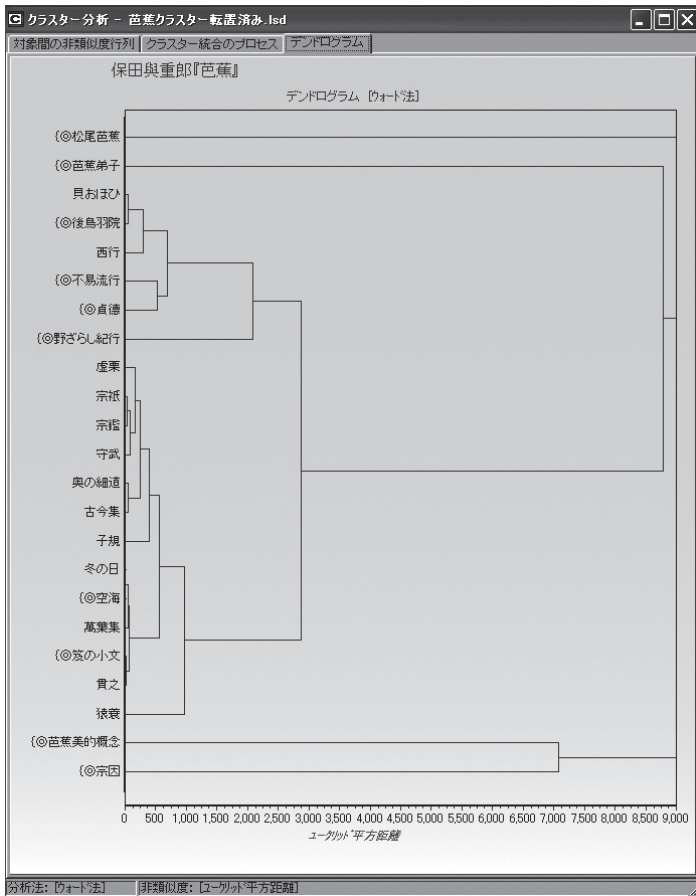


図3 事項・人物のクラスタ分析

* 12 谷口敏夫「三島由紀夫『豊饒の海』」京都光華女子大学研究紀要、2001-2004の分析に詳しく述べた。

4. 1 事項・人物のクラスター分析

この図3（デンドログラム*¹³）は、4.2で後述する図4（事項・人物地図）が用語の位置情報から、その出現パターンを二次元表示することに比較して、位置情報の隣接度計算から用語集合間の類似性を導き出している。図3から各用語群の近似や収束状態をながめ、特に顕著なクラスターの解釈をしておく。

(1) {貝おほい、後鳥羽院}

このクラスターははこのままでは分かりにくい。芭蕉の初期句集「この『貝おほひ』は當時の小唄や流行言葉を自由自在に驅使して、發句判詞共に才氣に富み、芭蕉の處女撰集としてのみでなく、俳諧史の上から云うても注目される作品であつた。」（有心と無心）といわれ、後鳥羽院との関連をどこに求めるのか意味的には弱い。しかし、次の引用をみたとき納得できる。

こゝに現れた文藝的に濃厚な爛熟は、中世以來の歌學の實際的な思想から云ふと、絶對の過程だつた。無心體の「寂」に入るについて、「艶^{えん}」を旨として修業せねばならぬといふことは、代々の歌學者の云うたことだし、又俊成や西行の自らのみちとして教へておいたところで、さらに後鳥羽院が、大きい觀點から御決定になつたことだつた。

～

芭蕉個人の歴史から云うても、詩の歴史として云うても、「貝おほひ」はこの道程の作品であつた。（有心と無心）

さらに、{西行 {貝おほい、後鳥羽院}} というまとまりにまで目を向けると、芭蕉の初期句集「貝おほい」は、この段階で西行や後鳥羽院の伝統に直結していると、保田の論考がよく現れている。

(2) {不易流行、貞徳}

上述(1)に関連して {不易流行、貞徳} が {西行 {貝おほい、後鳥羽院}} に近接している。不易流行と貞徳に関連して、参考に次の用例を引く。

* 13 デンドログラムとは、樹形図と翻訳できる。

この「不易流行」の考へ方から芭蕉は、決して宗祇守武の詩品に絶對的なものがあると思つてはゐなかつた。この復古の考へ方を見間違ふと、宗因は俳諧中興の祖だと云うた芭蕉の心持について殆ど理解し得ないだらう。(道と俳諧)

芭蕉は、宗祇、荒木田守武、山崎宗鑑、松永貞徳、西山宗因らの連歌から俳諧に至る道を常に意識してきた。そして俳諧の流行の中から、自らの不易を見つめたと言える。なお、芭蕉の初期「貝おほい」時代は、北村季吟（貞徳の貞門）の影響下にあつたと推量できる。

(3) {虚栗 {守武 {宗祇、宗鑑}}}

このクラスターは {守武 {宗祇、宗鑑}} の関連から、芭蕉以前の中世室町時代の連歌俳諧史を意味している。一般に、宗祇は准勅撰集の「新撰菟玖波集」^{しんせんつくば}を編纂し連歌の芸術性を高め有心連歌／柿本連歌の例証と言われている。続く山崎宗鑑は室町末期に滑稽卑属な「犬筑波集」^{うしん}（無心連歌／栗本連歌）を選び、荒木田守武とともに「俳諧（滑稽）連歌」の創立者として知られている。この流れが、江戸時代の貞門（松永貞徳、北村季吟）、談林（西山宗因、井原西鶴）、芭蕉へと続いた。そしてこの三者を束ねて芭蕉の「虚栗」^{みなしぐり}がクラスターをまとめたと解釈出来る。以下に用例を引く。

宗祇、守武、宗鑑、貞徳、宗因といった巨星、及びそれを縫ふ群星に對して、芭蕉は誰がしたより明確な批判をしてみた。しかしさういふことと別に、芭蕉は己の俳諧を考へ、風雅の道を思ふにつけて、一層大切な先人の祭り方の中に、わが朝の文藝のいのちのあり方を考へた。道をいのちとする者のあり方を考へたのである。(道と俳諧)

けれど俳諧は市井隱者のものである。つまり市民的現實生活を、その中に於て淨化する方法である。しかもをかしみや滑稽が、こゝで必要だつた。さうしてさういふ舊來の俳諧觀を芭蕉は誰よりも大切にしたのである。かういふ形の俳諧に於て、後鳥羽院以來の詩人の志をあきらかにせねばならぬ。これが天和三年に「虚栗」のあとへ、彼が「鼓

舞して」誌した思想の根柢だつた。(風雅論の歴史感覚)

さてこの項のまとめとして図3から、図の上部では「◎野ざらし紀行」がいくつかの小さなクラスター（小概念）を束ね、図の下部では「猿蓑」がまとめている。「奥の細道」や「◎笈の小文」はクラスター形成が局所に止まると考えられる。すなわちこの図3から推測できることは、テキスト『芭蕉』は「野ざらし紀行」と「猿蓑」を二つの柱として、芭蕉を論じていると言えよう。

4. 2 事項・人物地図に表れた小概念

図4は、クラスター分析した結果から得た用語間の類似度による近接の程度を、等高線（地図）の用語並びに適用したものである。具体的には、図の右上端に表れる項目「◎松尾芭蕉、◎芭蕉弟子、貝おほひ、～」以下の並びは、図3の左にある項目並びから得たものである。すなわち、図4の横並びは文章の通時性によって<1はしがき>から<8軽みと慟哭>まで一意に確定し、縦並びはクラスター分析の結果から、用語位置の近接度から用語や用語群を並べたものである。これを、図書『芭蕉』の文章地図として考えてみる。

ここで、図3のクラスター分析によるデンドログラムと、図4との相違はこれまで述べてきたが、重ねて説明する。まず図3の、統計手法の一つであるクラスター分析の結果は、テキスト中の比較的頻度の高い用語が、テキストの位置を基にしてどのくらい隣接して表れたかを示す。すなわち、用語間の隣接度を得るための手法としてクラスター分析をつかった。

次に、そのクラスター分析によって、クラスター（組みあわせ）が表示されるが、ここではそのクラスターそのものを詳細に分析するよりも、そこから得られた用語間の「列挙の様子」を得ることに主眼を置く。たとえば、「貝おほひ、◎後鳥羽院、西行」という列挙に注目するわけである。この列挙の順番は、用語間の文章内の位置による相関係数によって導かれたもので客観性を持つ。

今回は、従来とは異なり、縦並びの用語間に空行を入れず、用語と用語の図示を滑らかにすることで、テキストという海の中での用語の位置をより鮮明に

「島」として表現した。この用語群島は従来から、テキストが持つ「小概念」と表現してきたが、この度は試験的に「島」の用語を併用する。

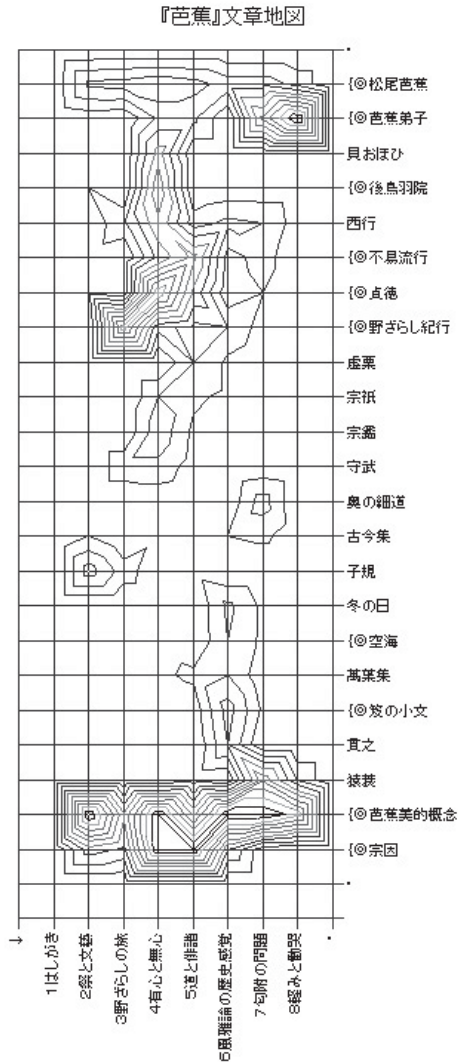


図4 事項・人物地図

(1) 文章地図全体の概略

-1 孤島

この地図では等高線の密度が高く全体に濃く描かれた部分が、テキストの中で重要な島ないし小概念を形成しているといえる。ただし何も表れない箇所も頻度がゼロとは限らない。章の単位で限りなく低頻度（事例では5以下）の場合は地図に姿を見せない。

まず、章立ての前半に表れる「子規」と後半の「奥の細道、古今集」は孤島と言える。他と無関係ではあり得ないし、その概念が軽いわけではないが、本テキストでは点描されるに止まる。「子規」については明治以降の俳句に保田が相当な距離を持って『芭蕉』を記したと想定はできる。「奥の細道」については、保田の次の引用が特徴をしめす。

實に「奥の細道の旅」にしてさへ、「野ざらしの旅」の外篇にすぎなかつたと云ふのは、野ざらしの旅の心ののちに、必ず生れる旅心だといふ意味である。思想と精神の歴史の上から考へて、私はこのやうに解釋する。(有心と無心)

すなわち、保田はここで「野ざらし紀行」に重きを置いて『芭蕉』をまとめたと言っているに等しい。

この孤島タイプの小概念は、無視することは出来ないが、テキストの核ではないと蓋然的に言える。読後感では、たしかにそうであった。小説作品だとそういう想定は下せないこともあるが（恋の字をほとんど使わず書かれた恋愛小説がある）、評論、学術論文の場合にはそのような曖昧なことはないと思ってよからう。

-2 「野ざらし紀行」大陸

この大陸には二つの高峰がある。一つは3章「野ざらしの旅」と交わる「野ざらし紀行」そのもので、他は8章「軽みと慟哭」と交わる「◎松尾芭蕉」や「◎芭蕉弟子」である。この二つの高峰をつなぐものが、「◎後鳥羽院」や「西行」と言える。このことは「野ざらし紀行」とは、芭蕉が蕉門を率いて現実の江戸元禄時代の数年前を生き、そのなかで後鳥羽院や西行に思いをこらし野ざらし

の旅に出かけた、とうがった解釈ができる。さらに、紀行文「野ざらし紀行」に隣接して、その背景には「宗祇、宗鑑、守武」らの連歌俳諧の歴史が潜んでいると言える。

ここで、図4からみた「野ざらし紀行」大陸を、そのよう確定的に判定しているわけではない。客観的な用語の位置関係を可視化することで、多様な解釈が生まれるが、ここではその一つを例示したわけである。

3「猿蓑」大陸

この大陸は句集「猿蓑」が、このテキストでは一般概念に近い「芭蕉美的概念」と、句集「冬の日」や「笈の小文」とを結びつけている様態を示している。猿蓑について保田の言及をみると、地図の姿に理解が深まる。

芭蕉の俳諧確立の理想は、既に「笈の小文」にも濃厚に出てゐるが、その實質が位置づけられたのは、やはり「奥の細道」と、それにつゞく「猿蓑」によつてである。この「猿蓑」は蕉門最高の撰集として、彼らの間ではそれを古今集に比してゐた。「猿蓑」がもつてゐる美的様相や、この集の撰の席上で語られた一種の合言葉は、蕉門の美的概念として、今日でも頻りに語られてゐる。(句附の問題)

ここで芭蕉の美的概念という言葉が「猿蓑」と合わせて述べられている。これは文章地図とテキスト実体との関係の深さを現す例証となる。

以上の3例から、図4から判定できることは、テキストが二つの孤島と二つの大陸からなっていると言える。それは保田の『芭蕉』が、孤島としての「子規」や「奥の細道」への言及が少なく、「野ざらし紀行」、「猿蓑」に焦点を当てたテキストだと推定できる。

(2) 文章地図の通時的分析

本論での通時的分析とは、テキストの冒頭から末尾にかけて、各章の順序を時系列を見なし、個々の用語ないし用語群（図4では縦並びに列挙された用語）がどのような遷移を示したかを分析することである。

図4の最上段 {◎松尾芭蕉} および下段 {◎芭蕉美的概念} は、通時的に間断なく出現し、それぞれの用語ないし用語群は各章に満遍なく使われていると考えて良い。この二つの用語群の通時的分析からは、保田與重郎の『芭蕉』が芭蕉と彼の美的概念を現した著作であると結論*¹⁴ できる。

{◎芭蕉弟子} が文章中盤の「4 有心と無心」から「8 軽みと慟哭」まで間断なく表れ、しかも最終章「8 軽みと慟哭」では高い頻度をもつ。これは第8章を特異点と判定できる。おそらく、この最終章は芭蕉の晩期なので（大坂の）弟子達との交流、および芭蕉死後の動向から密度が高くなったと推定できる。

全編のほぼ半数に出現するのは、{西行} {◎不易流行} {◎貞徳} {◎野ざらし紀行} {猿蓑} {◎宗因} である。以下に、あらかじめ人物3名についてテキストから事例を示す。

{西行} が、特に頻度の高かった「8 有心と無心」から保田の用例を引く。

西行が出家遁世した身の上で、世の中については勿論、男女間の情などには、毛頭も心にとゞめてみぬと云つた境涯に住みつゝ、なほかつ旅のある夕方に、漠然としたもののあはれを味ふと歌つたことは、中世の隠遁詩人たちにある安心と自信をさへ與へた。西行は形は僧だが、佛者と趣きがちがつてゐた。當時僧になるのは榮達する方便だが、西行は世間を離れるために髪を剃つたといふことも大分にちがつてゐた。西行が頭を剃ることによつて示したのは、志であつた。(有心と無心)

西行の僧形は仏者であることよりも、万葉集以来我が国に一貫する文明・文化(国の歴史)を詠う詩人の志を示していると言える。

松永 {◎貞徳} は、

俳諧は滑稽を本として生れ、貞徳などは、俳諧は俗のもので、たゞ歌連歌へ入る門と考へたほどで、歌連歌より低い藝能としてきたのは、

* 14 ものの考え方として、この事実を「当然」「自明のこと」と捨てるのは本論の趣旨にそぐわない。本論はテキスト著者の用語の使用とは、文章という人為人工の構造物の中で意識的に使われ、その傾向は重要用語の頻度により見られるという原則に立っている。故、自明のことが自明として可視化されることが、第一義的に重要である。

一般的だつた。貞徳はよい志と思想とをもつてゐたが、道は形の上にあるやうに考へ、復古といふことを形の上で考へた。これは芭蕉の道の自覺と大いに異るところである。貞徳はみやびが人心にあるいのちの原理なることを知らず、教へ與へねばならぬものと考へこんでゐたのである。(有心と無心)

保田は『芭蕉』(昭和18年刊)の後では、たとえば『日本の文學史』(昭和47年刊)で、貞徳の『戴恩記』に現れた源氏物語への関心の深さを顕している。よって、「貞徳はみやびが人心にあるいのちの原理なることを知らず」とは、晩年には思い返している可能性もある。

西山 〔◎宗因〕は、

宗因を押しつめるなら、貞徳によつて結果的に殺されて了つた俳諧を甦らせ、貞門法式にしばられた俳人を開放すると共に、俳諧と共に彼らが無眼の頽廢へ導くにすぎない。つまりその滑稽には、精神上の自信と安心はなく、たゞ世俗一般の生活といふものが、滑稽を支へてゐるにすぎぬといふ、文藝の上から考へると、はかない大衆文學的根據しかもたなかつた。

～

しかし宗因の考へ方にしても、貞徳の思想にしても、そこに止まる限りでは、何らいのちの秩序の豫想をもたない淵だといふことが、宗因の貞門に對する挑戦によつて芭蕉に知られた。芭蕉はこの時、宗因の形や跡を見たのでなく、己の心と俳諧の道を見たのである。即ち貞門と談林とを對決させて、終に眞の道を知つたのであらう。流俗的な觀念に挑戦する詩人の頽廢の諸相を、己の掌にひろげてゐた時、その間に一本の貫くみちを見る機縁を與へたことが、宗因は中興開山だと感謝した眞意と思ふ。俳諧は俗に立脚するが、風雅のものだから反俗である。(有心と無心)

芭蕉にとっての、松永貞徳、および西山宗因の位置付けが明確に現れている。さらに「俳諧は俗に立脚するが、風雅のものだから反俗である。」という保田

の解釈は蕉風を理解するに貴重な一行だと言える。我が国では朝廷の雅が地下みやびに潜ったとき、風雅は時代への反俗だったと理解できる。

(3) 文章地図の共時的分析

先に通時的分析の一端にふれ、次は共時的分析をみってみる。これは、ある時点（すなわち章ないし節）で、どのような用語群が共に出現（共起）しているのかという視点でみた分析である。

{子規} と {◎芭蕉美的概念}、{◎松尾芭蕉} とが、前半の「2 祭と文芸」で同時に表れている。これを共時的に「共起」した現象とする。ただし、{◎芭蕉美的概念}、{◎松尾芭蕉} は間断なく表れる用語群なので、常に他の用語群のどれかとは共起することを失念してはならない。

しかし、{◎芭蕉美的概念} の高峰と {子規} の高峰とがこの第2章で共起しているのは、なんらかの原因があると考えて良い。

さすがに子規は、純潔な魂と氣節をもつてゐた。この人はひそかにうちにかくはへた志によつて、わが國風を以て、十九世紀の長篇文學に對抗すべきことを主張し「歌人に與へる書」をつぎつぎに誌したのである。彼はまづ俳句の改革を考へ、歌の復興をめざした。さういふ主張の大體は近世以來の繼承であつたけれど、明治日本の文藝の指導者が、すべて一様に國際情勢に驚き、彼方の論理を以て日本の改革をはかり、彼方の情態と等しなみに我をなさんとする情勢論のために、懸命になつてゐた日に、子規が初め俳句の復興を云ひ、一轉して國風の改革に轉じたことは、俳句和歌の短い形式こそ國民の怠惰を示すものであるなどと考へた人の眼のつけどころと、大いに異なるものがあつた。

(祭と文芸)

保田はここで、正岡子規の中に國風の志をみている。昭和に生きた保田が芭蕉を論ずるに、明治の子規をその志から挙げたことが分かる。

次に、4.2 (1) 概略で述べた二つの大陸 {◎野ざらし紀行}、{猿蓑} をそれ

それぞれ共時的に眺めると特異な点が見えてくる。なお、以下「◎松尾芭蕉」と「◎芭蕉美的概念」とは基本の用語として、すなわち各章で他の用語と恒常的に共起するので触れない。

「◎野ざらし紀行」では、高峰が「3野ざらしの旅」で特徴的に表れる。しかしこれは章題に即したもので深くは論考しない。言ってみれば、その章題のとおり保田は論述している。そこに「西行」が共起するのは、芭蕉の旅とは故人、すなわち西行や後鳥羽院を求めての旅である故に、表2から芭蕉に次ぐ高頻度の「西行」（47件）が共起してもおかしくない。

注目すべきは「4章有心と無心」で、本論巻頭以来重要と見なしてきた用語ないし用語群の半数が集結していることである。特に「◎後鳥羽院」との共起を強く持つところにこの章の重要性がある。「◎芭蕉弟子、貝おほひ、◎後鳥羽院、西行、◎不易流行、◎貞徳、◎野ざらし紀行、宗祇、宗鑑、守武」と多くの用語共起が見られる。図4からこのパターンを見るだけで、「有心と無心」というテーマを掲げたこの4章の重要度を概観できる。

この事情を考えてみるなら、俳諧という言葉にはもともと滑稽ないし卑俗があり、宗祇、宗鑑の連歌俳諧から、貞門、談林の俳諧史にそれは現れている。一般に鎌倉時代からの連歌が古今、新古今の流れをくむ有心連歌／柿本連歌と滑稽・卑俗な無心連歌／栗本連歌に大別され、前者を堂上貴族が愛好し、後者は武士、庶民に好まれた、と言われている。芭蕉と同時期の西山宗因・井原西鶴らの談林は、この無心連歌の流れを色濃く含んでいる。そういう中で、芭蕉が蕉風を普及させ、最後には弟子達さえ理解しがたかった「軽み」世界にまで進んだ。軽みは、俳諧の滑稽さや日常性を内に含み、なお軽々と有心世界を匂いたたせる短詩形芸術なのだろう。

以上の諸点を考えて、この第4章「有心と無心」は連歌俳諧の歴史の中で、芭蕉が西行、後鳥羽院以後の隠遁詩人の流れを深く意識したことに触れた章であり、論の中核部分と言える。

次に「猿蓑」大陸について考える。

「6 風雅論の歴史感覚」において、猿蓑は「冬の日、◎空海、萬葉集、◎笈の小文、貫之」と共起し、別の「野ざらし紀行」大陸のうち、「西行、◎不易流行、◎貞徳、◎野ざらし紀行」とも、大陸間での共起を見せている。大陸の密度においては、「◎野ざらし紀行」が濃く表れているが、重要語の共起の要素としては、「猿蓑」大陸の方が全体を覆っている。よって、この「6 風雅論の歴史感覚」は、芭蕉・風雅論の極めを叙した章であろうと推測できる。

芭蕉の風雅は歴史への回想に源し、咏嘆と慟哭に轉ずるものである。私はそれを思つて、「歌なる哉」「詩なる哉」の歎聲を發する。眼にみる一木一草に歴史の事實を回想できねば、それは風雅でない。

～

芭蕉の風雅は、単にある心景を寫生することではない。觀念論的な美の思想によつて、対象をある型に描くことではない。さらに寫生をへて何かを象徴するといふ考へ方の、象徴ではないのである。象徴といふ思想を、西歐や支那の藝論で云うた範圍では、芭蕉はさういふ象徴を描くことを念としたのでなく、國史に於ける代々の先人の悲しみと歎きを描くといふ明確な思想をもつてゐた。(風雅論の歴史感覚)

保田のいう詩人の志とはこの「國史に於ける代々の先人の悲しみと歎きを描くといふ明確な思想」だと断言でき、かつそれが芭蕉の志であつた、と解ける。

(4) その他の特異なパターン

「◎芭蕉弟子」が最終章「8 軽みと慟哭」で顕著な頻度をみたこと。これは芭蕉晩年に弟子達が離反したことや、大坂での逝去、去来の奉仕、其角の来阪、その夜の内の滋賀県・膳所義仲寺への遺骸搬送、菅沼曲水らの嘆き、伊賀の門弟達の茫然自失、……。と、残された弟子達の姿が頻出したことによる。

「奥の細道」が孤島化している様態はすでに述べたが、「7 句附の問題」で精緻に共起をみるなら、「◎芭蕉弟子、西行、◎不易流行、古今集、猿蓑」となり、この章では芭蕉の俳諧に対する深まりを、奥の細道から猿蓑への過程に見てい

る。これは4.2 (1) -3で「7句附の問題」からテキスト事例を引いた。

また著名な「奥の細道」については、芭蕉が旅した順に保田は紀行文にそって芭蕉に同行し、その結論は「奥の細道と歌枕」である。それは保田の血肉化した基底の考えとなり、他の箇所でもわざわざ「奥の細道」と言及するまでもなかったのではなかろうか。

我國の詩人の旅は、漠然とした旅の誘ひに導かれる旅でなく、歌枕をたづね歴史を歎く旅であつた。芭蕉の場合は、さういふ代々の詩人の思想を、近世の中頃に歩んだものだから、すでにその時代では、自身を最後の人と見る氣持を激しく描き出してゐる。

～

松島、象潟の美を傳承することは、まだしもさほどではない。偏遠の地に、西行の歌つた何でもな一本柳を傳承し、武隈の松を植ゑ傳へてきた事實は、そこを訪ふものに、涙を流させる。その事實が歴史であり、風雅である。芭蕉は殊さらにさういふ偏土の名所に、さゝやかな歌枕のあとを訪れようとしたのである。風流風雅はかうしたものであつた。その旅自身がわが千歳の文學の極致に結ばれる。偏土の歌枕をしたしく訪ふ志なくして、我國の文學の歴史や詩人の思ひを語る勿れといふことは、私の文學者的信念として、初めより持ちつゞけてきたものである。(句附の問題)

5 まとめ

本論では、まず3.1でテキストに用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、おおよその傾向をみた。図1の円グラフからは、〈文明観〉、〈人名〉、〈文学芸術〉、〈俳諧和歌〉の4つに大分類される用語をほぼ均等に使っていることがわかる。さらに人名の7割を占める「芭蕉」からみて、このテキストが、芭蕉を論考するために〈文明観〉〈文学芸術〉〈俳諧和歌〉の用語群を使っていることが自明となる。

図2ではこの用語群を地図化した。通時的分析からは、〈俳諧和歌〉の大分類が、第5章「道と俳諧」で頻度を高くしている。通時的・共時的の二方向からは〈俳諧和歌〉と〈人名〉とが最終章「軽みと慟哭」とで重なっているところが見える。

次に3.2では、この事項や人物の詳細な異同を調べ、事項・人名を表3にまとめた。単独の頻度が12以上の用語を意味的に精査してまとめた結果、次の23件の用語(群)を選択し、内訳も示した。◎は用語群で、()内は補記、下線は芭蕉・七部集と呼ばれている句集である。

◎松尾芭蕉	◎後鳥羽院	(紀)貫之
◎芭蕉美的概念	(正岡)子規	(山崎)宗鑑
◎西山宗因(談林)	◎ <u>笈の小文</u>	<u>冬の日</u>
◎芭蕉弟子	宗祇	<u>虚栗</u>
◎ <u>野ざらし紀行</u>	◎空海	<u>奥の細道</u>
◎松永貞徳(貞門)	<u>貝おほひ</u>	
西行	萬葉集	
◎不易流行	古今集	
<u>猿蓑</u>	(荒木田)守武	

4.1ではこの23件の用語群をクラスター分析した。方式としてユークリッド平方距離及びウォード法により、用語間の距離を示したデンドログラムを得、これを図3「事項・人物のクラスター分析」とした。

図3からは、最上段の{|◎松尾芭蕉|、|◎芭蕉弟子|}、下段の{|◎芭蕉美的概念|、|◎宗因|}が顕著なクラスターを形成せず、これらは満遍なく各章に分散していると理解できた。つまり、なんらかの意味を持つと言うよりも、テキスト『芭蕉』の下地、あるいは「大海原」を現していると解釈した。それに比較して{|◎野ざらし紀行|、および|猿蓑|}という二つの大クラスターがいわば大陸のように形成されてことが分かる。

最後に4.2で、同じ23件の用語群を（文章）地図化し図4を得た。文章中の用語頻度を等高線であらわす「文章地図化」の要点は、テキストという時系列にそった流れ（順序）を章立てで一意に確定し、用語群の配列をクラスター分析によって、すなわち用語の位置情報から用語間の類似・近接度を計算し、その結果で対象用語群を並べる方法を取ることである。この方法でテキスト『芭蕉』の可視化が計られ、図4からいくつかの明確な特徴を得た。そこから『芭蕉』はパターンとして、二つの孤島と二つの大陸を持つことが分かった。

二つの孤島とは、{子規}と{奥の細道、古今集}があたかも大海に浮かぶ孤島の様態を見せたことによる。{子規}については、前半の第2章「祭と文芸」において、保田が執筆した時代（昭和十年代末）の芭蕉観や子規観を説明するために言及されたもので、正岡子規その人への考察はこの章ないし次章に止まる。

{奥の細道、古今集}は図4によって第7章「句附けの問題」で特徴的なパターンをあらわすが、これは同章が芭蕉の俳諧の深まりを、歌枕の旅としてみた「奥の細道」から、蕉門で古今集と言われた「猿蓑」に至る経緯にあると述べていることから生成されたと解釈した。概して、奥の細道はこの第7章に旅の経緯がしるされておられ、保田は歌枕を求めることが我が国の風雅のもとであると示唆し、奥の細道を背後に置き、その極みとして句集「猿蓑」に言及している。つまり、乱暴に言えば、「猿蓑」は「奥の細道」を跳躍台にしているとも言える。よって保田の主論は「奥の細道」ではなく「猿蓑」にあった。

さらに二つの大陸とは、図4から明瞭なように、{◎野ざらし紀行}と、{猿蓑}という二つの密度の高い大陸のようなパターンが明瞭に現れたことを示す。この意味はすでに4.2でテキストにあたり解釈を記した。

まとめとして『芭蕉』は、「野ざらし紀行」で宗祇、山崎宗鑑、荒木田守武、松永貞徳から出た芭蕉を描き、「奥の細道」をへて「猿蓑」の完成度へ至った様態を記した図書であるとする。{◎宗因}は{◎芭蕉美的概念}を述べるとき、対置するものとして常に言及されたといえる。

以上で本論を終える。

補記として、当初はテキスト『芭蕉』において「奥の細道」の扱いが多少軽く感じられ、これには驚きを味わった。そのことは可視化しパターンを見ることで孤島のような様態を発見し、さらに顕著になった。なぜそうなったのかは、パターンを見るだけではよく分からなかったが、テキストそのものに即すれば、保田が「歌枕」の旅を説明するために「奥の細道」の各条に言及し、かつその旅は保田の血肉となり地文となり、ことさらに「奥の細道」が表に現れなかったと、おおよその結論を得ている。

謝辞

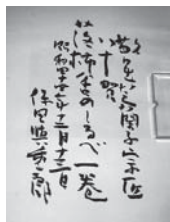
データの整理について、葛野図書倶楽部 2001・坂口昭代副長 2003 の助力に感謝します。

平成 21 (2009) 年 9 月 21 日 谷口敏夫 識

付録：「^{らくししや}落柿舎のしるべ」他について



保田與重郎は 50 代半ばから晩年まで京都市右京区鳴滝に住み、自邸を身余堂と名付けていた。芭蕉の晩年が右京区嵯峨小倉山緋明神町の落柿舎や大津市膳所の義仲寺に縁深くあったと同じく、保田は落柿舎庵主を勤め、墓は義仲寺にある。保田の芭蕉や俳諧に関する想いの深さがうかがえる。写真『落柿舎のしるべ』は落柿舎叢書第三集で、昭和 45 年 1 月 1 日刊行のものである。定価二百円、発行者は工藤芝蘭子^{しらんし}、財団法人落柿舎保存会（代表者 土出滋）と奥付にある。54 頁の小冊子だが、写真が十葉含まれ、貴重な冊子と考え紹介した。



次の写真は冊子冒頭のもので「敬呈 芝蘭子宗匠八十賀／落柿舎のしるべ一巻／昭和四十四年十二月十三日／保田與重郎」と読める。芝蘭子宗匠は立志伝中の俳人で、若い頃に大阪堂島の米相場で活躍し金看板を上げるまでに至ったが、思うところあって隠棲し俳人となった。その経緯は、

保田の『現代畸人傳』に詳しい。

同しるべには「嵯峨天皇皇女有智子内親王の御墓は西隣にあり、落柿舎の裏の所有地の竹藪の中には、山ノ井の姿そのまま泉があつて、これが西行庵の趾を證する唯一のものだといふことを、西田直二郎博士が考証し、この西行遺蹟の顕彰に執心して老後この近くに居を構へた。」とあり、去来や芭蕉が落柿舎を選び、住まいし逗留した事実の背景には、西行にまで遡る歴史があったのだと知られる言及であった。



三番目の写真はイロニア（新学社）の第12号（1996年4月）特集「芭蕉」の表紙である。この巻の「芭蕉と義仲寺／富山湊」には、近江での芭蕉と義仲寺の関係が記されているので、参考に挙げた。